

神に聞き従え！

まず、詩編 81 編を概観してみよう。頭書の「ゲティト」は「ゲテ人の音楽あるいは曲であろうか？ 新年、過ぎ越し祭等（新月と満月、神の祝祭）の賛美歌であろうか？ 1～6 節は神を喜び、賛美するように命じ、6 節 b から 11 節は出エジプトの救済の出来事を宣べ、12～15 節はイスラエルの頑なさ（罪）の告白？そして、16～17 節は主なる神は神に逆らう者を屈服させ、主の民を豊かに養って下さることが歌われている。一見、あまり代わり映えしない詩である。2 節で「喜び歌い」、「喜びの叫びをあげよ」と命じられているが、喜怒哀楽、「喜び」とは感情の問題であるのか、あるいは、意志の問題、信仰の本質的あり方の問題なのだろうか。自分の内面を見るのではなく、神ご自身を見、その恵みの業を見ることによって「喜び」が与えられるのであろう。信仰は意志の事柄であり、「聞き従う」ことである。

1. 大声で歌え（2～6a 節）

第 2 節は会衆に向かい「大声で神に向かって歌え」で始まっている。「神がわれわれの力であるから」。「ヤコブの神に向かって喜ばしい叫びを上げよ」と呼びかける。信仰は関係の事柄であり、神に向かうからこそ「歌い、叫ぶ」ことができるのである。2 節前半には「喜び」という言葉はなく、「大声で歌え」とある。これは「叫ぶこと」を意味し、しばしばそれは喜び、歌う叫びとなる。次の「喜びの叫びを上げよ」も「騒々しい大声を上げること」である。3 節～4 節では音楽隊に向かって呼びかけるが、「太鼓」(timbrel) 「琴」(harp) 「豎琴」(lute) 「角笛」(trumpet) も登場するオーケストラである。新年には「角笛」が吹かれた。(レビ 23:24) フルオーケストラの礼拝は難しいかも知れないし、神殿礼拝よりシナゴグ礼拝を受け継いだプロテスタント礼拝では必ずしも必要でないかも知れない。しかし、礼拝において大声で歌うことは（コロナウイルス感染拡大下では禁じられているが）できそうである。

これらは神から信仰者への「掟」「命じられたこと」「定め」である。信仰者は神と個人の関係に生きるというより、共に礼拝する神賛美の民である。

2. 礼拝における救済史の思い出(6 節 b～11 節)

礼拝において私たちは私たちからの想いではなく、思いがけない言葉を聞く。「わたし」という単数形であるから礼拝の司式者の取り次ぐ言葉であろうか。あるいは、この 6b は口語訳のように 6a に続くのかもしれない。すると神賛美への招きが「思いがけない言葉

(理解できない用語)ということになるだろうか。「これはイスラエルに対する掟/ヤコブの神が命じられたこと。エジプトの地を攻められたとき/ヨセフに授けられた定め。わたしは思いがけない言葉をきくことになった。」が救済史の導入になっているとも言えよう。

3. 重荷からの解放 (7～11 節)

出エジプトの経験は隷属の重荷からの解放の出来事であった。「わたし」主なる神がヘブライ人の肩から重荷を取り去り、彼の手から重いものを運ぶ籠を取り、自由にした。神である「わたし」は苦難の中から呼び求める「あなた」を救い、シナイ山でまた荒野の雲の柱と共に現れた雷鳴という隠れた仕方で「あなた」に答え、水のないメリバで「あなた」を試した。

この救済の出来事への応答として、神の民イスラエルは「わたし」として対面される神に聞き従い、異国・異教の神々の偶像礼拝をしないように招かれている。これらは十戒の導入文と第一戒を想起させる。「わたしが、あなたの神、主である」という神の自己顕現定式が「あなたがたをエジプトの地から導き上った神」という救済告白と一つとされる。「わたしとあなた (共に礼拝する共同体)」の神・人関係において、求めるなら、口を広く開けるなら、神はそれを満たして下さる。「聞け、わたしに聞き従え」。

4. 頑迷告白 (12 節～15 節)

礼拝における救済史の朗誦はイスラエルの頑迷さの告白と結びつけられる。「しかし、わたしの民はわたしの声を聞かず/イスラエルはわたしを求めなかった。わたしは頑な心の彼らを突き放し/思いのままに歩かせた。14 節～15 節は神自身の願望・救済・独白である。もし「わたしの民がわたしに聞き従い、イスラエルがわたしの道に歩む者であったなら/わたしはたちどころに彼らの敵を屈服させ/彼らを苦しめる者の上に手を返すであろうに!」「わたしの民がわたしに聞き従ってくれたなら!」これこそ神の願いである。神のイスラエルへの取り扱い、彼らを「思いのままに歩かせた」とあるように、カルト宗教と違って、彼らの「自発性」を尊重するものである。

5. 詩の結語：主なる神の勝利の願いと豊かな養いへの確信と神の約束の言葉

主を憎む者が主に屈服し (イスラエルが敵を屈服させるのではなく)、その状態が長く続くようにと願う。また、物質的にも、最良の小麦で養って下さることを確信している。最後に主の言葉が宣言される。「わたしは岩から蜜を滴らせて/あなたを飽かせるであろう。」「岩から水を」ではなく、「蜜を」が面白い。